

プラザ

ドイツ語の一コマから

城 眞 一

Shinichi JO

東京医科大学ドイツ語教室

語学を担当していると、授業中に思わぬ出来事に遭遇し、担当者自身が深く考えさせられることがしばしばある。そうしたことから、おもに教材として担当者が選んだテキスト（原典）のほうからやってくる。むろん、テキストは、時間をかけて慎重に選ぶのではあるが、そのさい、文内容の一行一句を吟味する時間の余裕は、無い。斜め読みしていた箇所予想外のことが書かれていて、担当者も授業中に初めてそのことに気づき、平静を装いながら、心の中では、「おお、これは！」と叫んでいることもある。

いままで数度このような驚きを経験したが、現在担当している医学独語の原典から先ごろ受けた触発は、いまなお余韻を響かせている。それは、ミュンヘン大学医学部の教授らが執筆した『医学と21世紀の社会』と題されたエッセイを講読していたときのことであった。熱心な学生が予習のさいに読解できなかった件（くだり）について研究室まで質問に来た。そこには、つぎのような文言が並んでいた。

20世紀の医療技術の進歩は「めざましいものがあるが、一方でそれは、人間存在の本質的な要素を覆い隠した。すなわち、病気、死亡、そして死そのものが、先進国の人々の日常の意識から大幅に消えていった。そうした人々の生感情は、若く健康な人間を理想像として掲げている、——自らの肉体の完全性をはぐくみ、護り、ただ嘆かわしい例外的な場合にのみ、しかたなく現代医学のお世話になる、このような人物を理想としている…[中略]…わたしたち医療に携わる者は、むしろ次のようなことから一般に広めなければならない。病気とは、人生（生命）のひとつの構成要素であって、予見不可能で嘆

かわしい欠陥でも、例外的状態でもないこと、そして死は避けがたいものであることを、世の人々に分かってもらわなければならないのである。」(aus: Prof. Dr. Wolfgang Hiddemann, München und Priv.-Doz. Dr. Stella Reiter-Theil, Freiburg: Verantwortung des Arztes des 21. Jahrhunderts. Bibliographisches Institut & F.A. Brockhaus AG, 2002)

この件は、現代医療と社会の間に根深く存在する、いわゆる医療不信の原因を突き止め、両者の本来関係を修復するための方法を論じた一節である。ここで問題となるのは現代の文明の恩恵に浴してきた先進諸国の国民に見られる、ある種歪んだともいえる死生観である。医師ないしは医療従事者は、人々の死生観そのものをあらためて、問い直し、正しい死生観を一般に啓蒙してゆく必要がある、と論者は主張している。それを要約すれば以下になるだろう。——病気を欠陥ないしは例外的な生の状態と考え、健康概念の反意語とみなす態度、あるいは死を生の反意語とみなし、死ないしは死にまつわる一切を生活領域から排除して、健常人の空間を造ろうとする態度、こうした態度は、歴史上まれに見るこの数十年の先進諸国の、平和な生活を享受している人々において共通して見られる。そしてこのような死生観をもった人々がいったん病気になれば、先進的医療の恩恵によって再び健常人に戻れる、と信じて疑わないであろう。ここに医療に対する過剰な期待が発生し、それが幻滅に終わったとき、医療への不信感がおのずと生じる。ゆえに、これからの医療に従事する者にとって重要なことは、このような死生観の過ちないしは一面性を、患者ないしはそれを取巻く社会（今日では世論を代弁す

ると自負するマスメディアのことか) に気づかせ、認識させることである。

論者の見解の是非は、ここで論じることはできない。それはたぶん小生の力量と経験を凌駕するであろうから。ここでは、このような一文と遭遇した学生が発した質問を紹介し、そのときに与えた小生の暫定的回答に、遅まきながら、注釈を加えておきたい。なぜならば、この種の問題は、即答を求められてもただ補足的に、反省的に、答えるしかなく、普遍妥当の決定論はありえないからである。

意欲的なその学生は、ある一点がどうしても理解できない、その論理そのものが分からない、と質問に来た。それは上の引用文のなかの「一方でそれは[20世紀の医療技術の進歩は]、人間存在の本質的な要素を覆い隠した。すなわち病気、死亡、そして死そのものが、先進国の人々の日常の意識から大幅に消えていった」という部分において、「人間存在の本質的な要素」がただちに、「病気、死亡、そして死そのもの」とみなされている点である。テキストは次のようになっている。

... sie hat aber den Blick auf wesentliche Elemente unseres Daseins verschleiert. Krankheit, Sterben, und Tod sind aus unserem Selbstverständnis weitgehend verschwunden.

この中の「人間存在」と訳した *unseres Dasein* の語の下で想起される内容とは如何、と学生に問うたところ、生存、人生、生活という一般的な答えが返ってきた。「生存、人生、生活」という語はいずれも「生」すなわち「生きること」を内に含んでいる。事実、この単語は日常的に、“*Kampf ums Dasein*” (生存競争のこと) という具合に現実的な生活を意味することがある。そうであれば、人間存在の本質的要素とは、何よりも生存のための、衣食住であり、健康さであり、愛であろう。疾病や死は、むしろ反対の極に位置する要素である。にもかかわらずなぜここではこれらの反対の極にあるものが「人間存在の本質的な要素」とされているのだろうか、——われらが学生はこのように考え、悩んでいた。

この学生の生と死にかかわる二元的思考法こそが文明病などとはけっして言うべきではない。学生は純粹に悩み、担当者に直截な質問を発した。現代社会では、むしろこの学生の持った疑問は正当なことかもしれないのである。真剣に答えるのが教師の責務であろう。

質問に答えるために、原典を何度も読んでみると、驚いたことに、学生が指摘したこの *Dasein* なる単語は、哲学者マルティン・ハイデガーがその著『存在と時間』のなかで使った「現存在」とほぼ同等の意味合いでつかわれていることが判ってききた。

ハイデガーは、ドイツ語の *Dasein* という語にあらたな意味を吹き込んだ。この哲学者においては、この語は存在論的な尺度によって分析された人間存在そのものを意味する。そしてこの「現存在」は、それが根本的に「死へとかかわる存在」 (*Sein zum Tode*) であるということにおいて、もろもろの存在者から明瞭に区別されるとした。およそ生命を持つものは多いが、反省的意識を持つ人間だけが、自己の、死に曝されていることを意識している。そしてこの自覚が、人間をそのひと本来の固有性に目覚めさせることになる。

ハイデガーによれば、現存在にとって、死は直接体験できることがらではないが、他人の死に立会い、目撃することはできる。そのとき、了解されることは、自身の死を引き受けなければならないのは、ただ自分自身だけであって、他の誰でもないということ、代理を立てることは不可能なまま、実存の不可能性(臨終 *Sterben*)を受け容れることを余儀なくされる、ということである。このような固有の死を自覚して初めて人間は、自己本来の固有の在り方を獲得することができる、とハイデガーは考えた。

疾病あるいは死を嘆かわしい欠陥ないしは例外的な状況として日常的意識から排斥する傾向は、ハイデガーによってあらかじめ厳しく批判されていたといえよう。しかしながら、死と生を対立的に捉えて、死を病院や寺院の領域に追い遣り、日常生活の中から死の痕跡をついには消し去ることに、西欧型の文明諸国は躍起になってきた。いや、それこそが、死や疾病を駆逐することこそが、近代国家の証であった。そのために、多くの人々もまた、自己の人生を真剣に考えるとき、本質的要素としてかかわるべき死を、見失ったのであろう。死は他人事になり、日常の生活には無縁の、別世界の事象となる。このとき、ひとは生きていることに、誤った、過剰な自信のようなものを得る。そして、このような人が病んで、病院に運ばれたとき、かれに死への決意性あるいは覚悟を短期間に獲得させることは、容易ではないと云わざるをえない。

しかし、このような説明だけで、学生諸君が心底から納得してくれるとは考えられなかったので、現代の

ドイツ思想史のなかで、このような考えが定着してゆく過程をさらに詳しく説明することとなった。

こうした考え方の系譜のなかで、詩人のリルケは、ハイデガーに先立って、人間存在を「死にかかわる存在」として、さまざまな比喩を駆使して描ききっていた。有名な『神様の話』の一話『死についてのメルヘンとその変わった追記』のなかでは、家を訪れた死神にもらった種子を庭で育てた夫婦が、やがて育った樹に花が咲いたとき、その若い花の香りがかぐ、するとそのとき世界が一変した、と語られている。日常生活を、死にかかわりつつ見直したとき、この地上に在ることのかけがえの無さが、一挙に直観できると言われているのであろう。

さらに別の詩のなかでは、「ひとりひとりが内部に持つおおきな死こそ、それこそが果実、すべてはそれをめぐって転回する」と歌われる。ひとが生のだなかにあって育てなければならぬのは、「自分自身の死」である、こどもが成長する過程は、死を自らの死として引き受けていく過程に他ならない、若者たちの成長に伴うおそれとおのきは、自分自身の死の自覚がそうさせるのである、死はここでは生を形成する源の力であり、また、流れ、壊れゆくものの中で不壊のものを見させる重要な契機と考えられている。

おそらくは1902年、ノートルダム寺院の傍らから、リルケは、目前の大病院「オテル・ディウ」に殺到する救急車の列を茫然と見ていたことだろう。そこにあるのは、偶然によって外部から死に襲われ、あるいは病によって不意を襲われた人々の群れであった。量産される死の工場の中では、もはや自分自身の固有の死

を死ぬことはできない、そこには覚悟された死、あらかじめ決意された死、自分自身で育てた固有の死はない、とリルケは痛感したに違いない。

『マルテの手記』(1910年)のパリの大病院の、以上のような描写は、後の時代の死生観を大きく左右したと考えられる。死への決意も、覚悟も持たず、また、固有性をも獲得しないままに、偶然の死に引き渡されることに、人々は戦慄した。こうした恐怖はさらに世界的な事件(原爆ないしはホロコースト)によって増幅される。このようなおおきな時代の流れの中で、ひとはいかにして自分自身の死を内面にはぐくむことができるだろうか。簡単に答えることは難しいが、それは、あえて言うならば、「いつ死んでも納得できるように生きること」、「内なる自分の死が、賛成してくれるようなことを成すこと」、「死を(病を)友として、たえず相談しながら生きること」であろう。このように書けば、人間存在の本質的要素は、やはり、死そのものに他ならないことが分かる。

生きてゆくことは死にゆくことであると感じられてならない。いや、それも不正確な表現である。生きた存在者に作用する力は、生と死の区別を超えたただ一つの法則であるように思われる。それは、自然の循環の中で、生成消滅を統べる同一の原理であって、人間の勝手な価値付けのかなたに、不壊に存在し続けるかのようなものである。

リルケは言う、果実を見よ、と。その中心には種子が宿っている。果実のように、個体の死を先取りして、死への覚悟を持つ者であれ、と。

(続く)